

“出会い”とその“深まり”

関 治 子

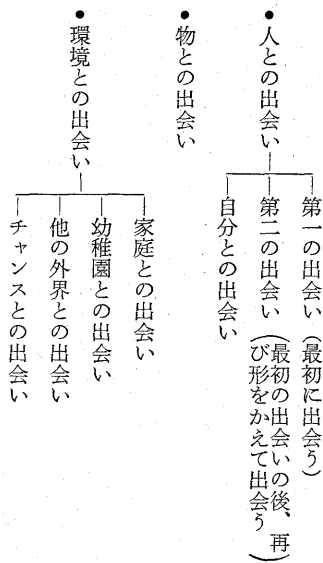
幼稚園の子どもを迎え、そして送り出している、出会いというものの不思議を感じてならない。今までは、新しい子どもとの出会いは、期待と不安に満ちた気持ちで迎え、そして出会った後は責任という重い荷物を背負って、その中に人間関係を進めていったのであった。しかし、これがくり返されていくと、子どもを送り出した後の責任感からの解放という気持ちでなく、ひとたび出会った人と人との関係は、今度は厚い人間関係の層となつて自分の中に積み重ねられていく。

子どもの側からいえば、日々新たに、幼稚園時代の人間関係は記憶が薄らいでいく人も多いであろう。子どもとしても、長い年月には、とっさに名が出てこないように瞬間忘れている場合もある。しかし、ひもといてみると、だんだんに思い浮かんでくるも

のである。これは、単なる思い出ということだけでなく、この人間関係が、子どもの成長の姿の中には、何らかの重要な役割を果たしているのである。

近ごろ、こんなことを感じているので、出会いの種類、出会いの方と、出会いの深まりとつながりというものを考えてみる必要がありそうである。

まず出会いの種類と出会い方について、より適切な論理がなり立つとは思いますが、私が今の自分の立場を幼稚園の子どものと考え合わせた時点で、次のように整理してみた。



人との出会い

1. 第一の出会い

幼稚園に入園して、教師と子ども、子どもと子どもの出会いがある。そしてここで、子どもの方もさまざまな感じ方と接し方をするのであるが、教師としても、それぞれの子どもに第一印象を持つのである。しかし、毎日の子どもの生活の大きな変化もあって、第一印象は日に日に変化をもってくる。大人同士の人の関係には、とかく変化はしても不思議と第一印象は確かだとか結局は変わらないことが多い。が子どもの場合には、子どもの側の成長による変化と環境に影響される変化というものが大きいのではないであろうか。ここで個々の子どもの特性によって、この最初の出会いをどういう形で深めていくか、つながりを持たせていくかは、今や新入の時期には数多く経験する所である。喜びも苦労も大きいし、また発見もあり工夫もする所である。

今、三歳児との最初の出会いに直面しているのであるが、本当にお互いの人生に一度しかない貴重なものだと痛感している。純粹に人を信じている姿、多少の不安をもつ姿、無視している姿（自分のことに夢中で人とは関係ないようなようすである）警戒している姿などいろいろであるが、この最初の出会いからの一日の変化は目を見張るばかりである。この時期ほど、出会いから深まりへの顕著なこともないであろう。それだけにこの時期の対処については、現場に接している私たちには、いろいろな努力

と数多くの経験があるのである。

2、第二の出会い

これは、何らかの形で出会った子どもと教師が、第二の段階として再び形をかえて出会う場合のことである。もちろん最初の出会いからつながりをもった段階でも（組担任として接していて）再認識、新発見といった出会いもあるであろう。幼稚園の子どもと教師という立場で最初に出会い接していて、次にある環境の中で再び形をかえて出会う場合が案外と多い。組担任でない子どもと、一つの遊びの中で深いつながりを持った場合に、今までとちがったものを見いだすこともある。また、他の組として客観的にみていた子どもたちと、今度は新たに担任として主観的にみる場合が生じてくる。これは再び形をかえて出会うものである。

ちょうど私はこういう出会いを経験した。今までに、担任が欠席した場合の一次的担任として出会ったこともあるが、この場合のむずかしさやおもしろさとまたちがつて、実に貴重な体験であった。子どもの方も一年一二年間一つの組という環境の中で生活経験をしてきて一つのわくづけというものができている。ここに

ある事情で私が新しい担任として登場した。子どもの側からも他の組の教師として最初の出会いはしている。そして今担任として直接に出会いをもった。再び形をかえて

の出会いである。大人の方も同様である。

ここで互いに持っていた第一印象というものを確かめつつ進んでいく。互いに持っていた第一印象が、明らかにそのままだと苦勞も少ない。中には、子どもの方でも試みをもったり、自分をどう表わしてよいかわからない場合もある。一つの行動によって教師がどう対処するか判断を待っていることもあった。あらゆる物に手をふれてみたり、口をはさんだり、きまった生活のリズムをわざと狂わせたりする。教師の側でも、これにまともにも当たっていると注意が多くなったりして悪循環でたまらない。子どもは教師の反応をさぐっている。教師は自分のわくづけを固持してはならない。特にこのように子どもの側にある程度の生活の積み重ねがあって、わくづけができつつある時はなおさらである。もちろん教師は何を教育していかなくてはならないかというのを、子どもたちと出会った上で早急に考えねばならないの言うまでもないことである。子どもとのこうしたつながりは、一時的には第一の出会いとちがってずいぶん困難も多かった。どうしてよいか悩みで一ぱいであった。

第一印象と、他の教師から得た資料(前任の)によって、その子どもについてのイメージを強くすることは、子どもを新たな目で見たら、読みとることができにくいのではないか。また、子ど

ももできた関係から何かぬけ出せないでいるかもしれないと考え、一つ躍進するつもりで、第一の出会いにもどるような気持ちにきりかえた。いいかたをかえれば、初心にかえるということもできよう。そうした上でつながりをつけ、深まりをもつ方が効果も上だろう。ただ、人間の感情というものは、簡単に色を消すことができないから、その時その時新たな出会いとして色づけていくのがよいかもしれない。そんな気持ちの整理ができると、時の経過と共に子どもとの信頼関係も少しずつ生まれてきた。子どもは人の気持ちを敏感に受ける。教師が不安に思い信頼できない気持ちをもってしていると、子どもも何となく信じ切れない落ちつかない反応がある。教師が大きな目的だけ心にしっかり持って、信じきって接していると、その信頼にこたえてまた、信頼関係が生じていく。

3、自分との出会い

教師も子どもも、自分というものについて再認識再発見することもあろう。子どもは形になってあまりわからないかもしれないが、時に「あれ? こんなことができちゃった!!」などと再認識していることがある。教育の一つの姿として、子どもが自信を持ち可能性をもって進めるように自分というものの再認識を教師が意図的に子どもに与えることもある。

大人の場合はこの自分との出会いが案外多いものである。年輪を重ねれば重ねるほど、この機会も多くなってくる。人と出会って、その深まりがマイナスの方向だけ見えてくるよりは、自分との再発見を大切にして、このままだと自意識過剰になってしまう懸念もあるから、これをまた人との関係にもどして相乗作用とさせていきたい。出会いという意味の中には合流するという意味もあるのである。

物との出会いは、これまた子どもの生活の中にたくさんあるであろうし、かなりのウエイトを占めるであろうが、人とのかかわり合いも深いし、環境との関係も出てくるので、ここでは省くことにする。

環境との出会い

人と物との出会いの中に含まれない出会いというものが、人生の中には数多くある。子どもの生活に直接かかわってくるものとしては、前の表にとり出して見たが、私は自分の経験の中で忘れられない音楽との出会いがある。身体も心も疲れ切っていた時のことである。

精神的にも時間的にも本当に余裕のない時にふとひねったラジ

オから、バイオリンコンチェルトが流れてきた。私はこの音楽に對して特別造詣が深いわけではないが、この音色がすうっと身にしみこんできたのである。この時、心がなごみ、いやされるのを感じた。本当にこんな出会い方があるのだなあと十何年前に感じたことを思い出した。

ここでは、チャンスとの出会いをとり上げたい。

幼稚園に入園するのも、学校に入るのも、仕事につくのも、時にはスターの座につくのも、結婚相手にめぐり合うのも、住居を定めるにも、何と人生の中にはチャンスと出会うことが多いのであろうか。これらは、すべて計画して必ずその通りに運ぶというものではない。もちろん偶然だけを頼りにしてはいるのではなく、なるべくしてなった必然の要素ももってはいるであろう。しかし、その時にチャンスをよく把握できる叡知を身につけたいと思うのである。小さい例でいえば入園当初に母から離れるきっかけをつかむこと——これも、子どもと教師と母親とが、どんなチャンスに出会ってどの一瞬をつかむかということである。

こう考えてくると、これも結局は前に述べたと同様、人とも物とも環境とも共に存在するものである。これら一つ一つの出会いを大切に受けとめて、前向きに深めていきたいものである。

(お茶の水幼稚園)